

小松帯刀なくして 明治維新なし

時に利あらず、ともに忠に殉じた大垣と会津の魂

幕末前夜

よく誤解されて、幕府は江戸初期より守られた鎖国を維持せんがため攘夷^(注1)を唱えたと思っている方がいるが、実はまったく逆である。開国派が幕府。薩長がこれに反対する攘夷派であった。薩摩藩も長州藩も欧米列強と戦ったからこそ、攘夷は困難と悟って、百八十度藩論を開国に転換させ、欧米の兵器、艦船、弾薬、軍事体制などのすべてにおいて、西洋化を急速に推し進めたのであって、幕府が鎖国維持、薩長が開国派と診るのは大変な勘違いである。

そこに將軍継嗣問題が絡み、南紀派と一橋派に分れて幕府内部は対立構造になっていた。そこに登場したのが南紀派の大老井伊直弼である。井伊家は譜代大名筆頭という地位にあり、歴代で6名も大老を輩出している家柄である。阿部正弘前老中首座のやり方は手ぬるいとして、彼は対立する攘夷派と一橋派に徹底した弾圧を加えた。これがあの有名な「安政の大獄」である。

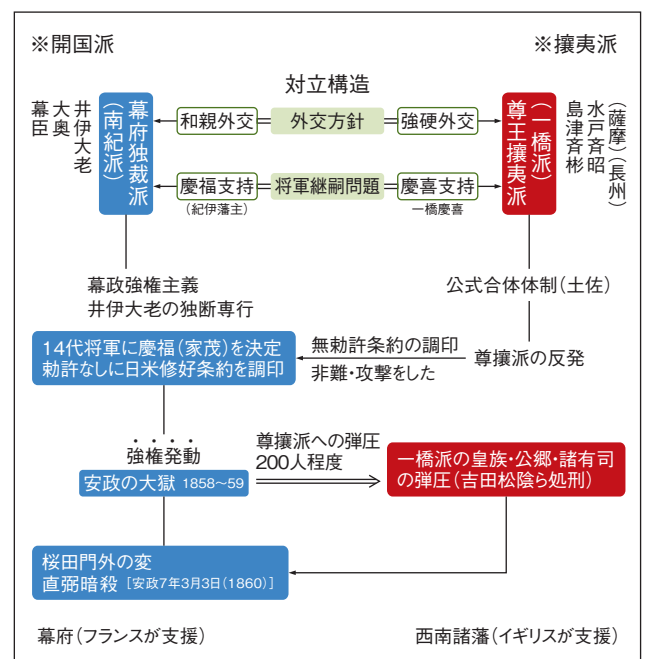
バックにはフランスとイギリスの東洋での覇権争いが絡んでいた。フランスは幕府を支援し、イギリスは薩摩藩を支援していた。このような国内外情勢をまず十分理解していただかなければ、この後、私が書くことも理解が難しいかもしれない。

このような状況のところに、アメリカという国が登場してきたのである。アメリカは1861年から1865年まで南北戦争をしていたため、国家の近代化がヨーロッパに比べ遅れていた。アメリカは鯨油をとるための長期航海に必要な食糧や油等々を補給してくれる国を求めている。当初はアメリカも紳士的に接して

きていたが、強硬派のペリーが東洋艦隊の提督になってからは、日本の武力制圧も辞さないという方針に変わった。

ペリー来航(1853)により欧米諸国との軍事力の差をまざまざと見せつけられた幕府は、このまま鎖国を維持しつづければ、アメリカをはじめとする欧米列強は、清国の場合と同様に武力でもって自らの要求を押し通し、日本を植民地とすることがわかっていた。いわば日本版「アヘン戦争」である。清=中国は自国の国力を過信し、勝てるものとして戦争に及んだが結果、イギリス艦隊をはじめフランス、アメリカ艦隊等々に完膚なく叩きのめされた。結果、中国国土は欧米各国に分断され、人民はひどい扱いを受けた。まさに奴隷扱いで中国側の権利などまったく無視された。

このような世界情勢を正確に把握していたのは、



▲桜田門外の変以前の政局

やはり幕府であったはずである。彼我の武力の差は大人と幼稚園児の程度の違いがあり、我が国の現状の戦力で戦えば必ず負け、我が国も欧米各国の植民地とされ清国の二の舞になるのは明らかであった。

欧米列強が我が国の主権を認めている今の段階で、その要求交渉に応じて戦争を回避し時間稼ぎをし、その間に我が国の軍事力を高めるのが得策であると老中首座の阿部正弘は考えた。もし攘夷派の言う通り、戦力差も知らず無謀にも戦っていたならば、その敗戦後は条約など有り得ず、自らを主張する権利など与えられず、日本人は下人扱いされていたであろう。日本は中国と違って国土資源も少なく、他国への依存度が高い国柄である。もし欧米各国の属国に成り下がったとしたら、日本の歴史は大きく変わっていたに相違ない。外国の武力を知らず、日本の武力があまりに稚拙であることも知らず、「志」だけで突っ走っていたと考ええると背筋が寒くなる。今の日本の状況を当たり前のように思い、歴史の転換点に目を瞑るのは日本人として恥ずかしいことである。

1863年イギリスと薩英戦争をした薩摩藩筆頭家老小松帯刀は、イギリスの一部の東洋艦隊には勝てたものの、我が国の軍事力とは大差があることを思い知らされた。帯刀はこの戦いにより、イギリスと敵対するより一層の友好関係を結び、産業、近代兵器、

文化すべて吸収しなければ我が国の独立性は保てないと感じた。

こうして小松帯刀は、全てにおいて世界最強と言われたイギリスから兵器・産業・航海術・新型機械・殖産興業等々について英国の技術者を鹿児島に招聘し、藩士に西洋の技術を学ばせた。そして藩士を積極的に留学させた。これらの土俵作りすべてに加え、西郷、大久保等を育てたその功績はもっと評価されるべきである。彼らも小松帯刀の引立てがなければ、下級士族の彼らが歴史舞台に登場することはなかったであろう。

これが『小松帯刀なくして明治維新なし』とタイトルに謳った由縁である。

一方、長州藩も下関戦争で四国連合艦隊に完膚なく打ちのめされて、攘夷の不可能を思い知らされていた。敵の砲弾はほぼこちらに命中したが、長州の砲弾は相手の艦船にさえ届かなかった。話にもならぬほど笑止千万であった。

そこで長州藩は攘夷を捨て、百八十度、藩論を転換。開国により殖産興業を興し、軍事改革のため欧米各国から武器を買い、西洋の戦略まで学ぼうとした。こうして後の政府の幹部となる「長州ファイブ^(注2)」をイギリスに留学させたのである。

薩摩藩と長州藩は、幕藩体制^(注3)を早く崩壊させ、統一国家「日本国」を建国しなければ、外国の恰好の餌食となることが自らの経験を通じて理解できたの



▲薩摩藩筆頭家老小松帯刀像



▲小松の一番弟子西郷隆盛像

である。攘夷派はまさに「井の中の蛙、大海を知らず」の諺のごとくであった。

問題は日本の近代化の立ち遅れを幕府自身が一番知りながら、どうして、自ら主導的に殖産興業、軍制改革、産業の近代化をスピーディに実行しえなかったのかである。

その答えは、幕府の250年に亘る政治と統治体制にある。幕藩体制において各大名は自分の領国を独占的に支配しており、日本国という統一した概念がない。各藩は独立国であり幕府はそれを統括していただけで、自分たちは徳川の直参の家臣ではないという思いが、特に外様大名にとって一般的であった。それゆえ幕府の権力が強いうちは従っていたが、それが緩む幕末ともなると、幕府の命令などには従わず無視するようになった。単なる連合国家だったからである。従って、一致団結して欧米各国に相對することよりも、自らの藩の保身の方を優先し、大半の藩が日和見政策をとり勝ち側に付こうと考えていた。

ましてや幕末には江戸初期と違い幕府権力も弱体化しており、各大名の同意なしには事が始まらない事態になっていた。従って、幕命に従わず日和見をしたとしても、かつてのように国換え、お家取りつぶしなどの強権を発動する力は、もはや幕府にはなかった。

そこで、薩摩・長州・土佐・肥後の西国雄藩が中心に立ち上がり、煮え切らない幕府を倒し天皇を国主

とする統一国家を創ろうとした。この動きに対して旧幕府側が抵抗して戦ったのが戊辰戦争のはじまりである。

1 大政奉還と王政復古

このまま行けば幕府は西国大名に武力討伐されかねない程の危機的状況にあった。土佐藩主山内容堂は、幕府の指導力の無さには僻僻^{へきへき}していたものの、徳川家に対してその恩義に報いることは考えており、討幕はするが徳川家は一大名として存続させようと考えていた。しかし、薩摩藩・長州藩は徳川家の存在自体が統一国家の妨げになるとして猛反対した。よって一旦は公武合体によって政務を行おうとしたが、これは武家と公家との権力闘争とも重なって成功しなかった。

そこで山内容堂は武力討伐を考えている薩摩、長州を出し抜く形で、将軍徳川慶喜に対して「大政奉還建白書」を提出した。この土佐の建白により慶喜は朝廷に対し「大政奉還上表」を提出した。そして1867年10月15日、朝議で受理が決定され、その勅許の沙汰書が慶喜に授けられた。自ら解体し朝廷に政務を任せることとしたのである。

これに対して討幕派の薩摩藩・長州藩両藩は、そのようなことをして自らが消滅されては革命にないと考え、徳川政権を血祭りにあげ武力討伐をしなければ日本の体制は根本から変革できないと考えていた。彼らにとって討幕は必須のアイテムであり、徳川家の絶大な影響力が残る事に大変危惧していた。徳川家康が豊臣家の滅亡を目論んだのも、単に武力討伐することは容易だが、豊臣に恩顧のある武将の精神的支柱を消滅させねば本当の意味での天下統一はないと考えたのと同じ発想である。

将軍慶喜は今の幕府の力では、薩摩藩、長州藩、安芸藩等の西国雄藩に武力においても勝てないことは分っていた。彼らに倒される前に幕府を自ら解体すれば、自分の面子も保てる。政権を担当したことの



◀会津松平藩九代目藩主
松平容保

ない朝廷はその後、また自分を頼ってくるだろうと考えていた。

しかし、朝廷は総裁、議定、参与を設け、太政官制を確立して、幕府などまったく当てにしていなかった。15歳で即位した明治天皇を中心に岩倉具視をはじめとする新政府側は、政権を幕府より取り返した後の体制など、しっかり考えていた。慶喜の思惑は外れた。

また、薩長をはじめ討幕派の岩倉具視らは次の一手を打ってきたのである。明治天皇の密勅として徳川家討伐の宣旨を薩摩、長州の西国雄藩宛てに出したのである。ここに、「王政復古」の太号令が12月に下された。これにより、徳川家も京都守護職松平容保も一瞬にして官軍から賊軍となったのである。大半の藩は朝廷側に寝返った。慶喜も容保も定敬（容保の弟で桑名藩主、当時京都所司代）も謹慎に追い詰められたのである。

2 鳥羽、伏見の戦い

「王政復古」の太号令により、各藩は賊軍になることを恐れて形勢は大逆転した。幕府自体が無くなった今、もはや徳川家に奉公する義務はない。親藩、譜代、外様の別もない。各藩は独自の考えで動けばよいのである。

小御所会議で、徳川の官位剥奪と800万石に及ぶ徳川家の領地を朝廷に返納させることが決定された。この決定を明治天皇の宣旨として、旧親藩大名であった尾張藩主徳川義勝、それと同じ旧親藩大名扱いの福井藩主松平春嶽を使者として伝えさせたのは滑稽である。

水戸徳川家は、水戸光圀公の時代から国学を柱として天皇が国主であるという思想をもっていた。慶喜も水戸徳川家に生まれ一橋家に養子に入りたいきさつもあり、朝廷と戦う気持はなく、寛永寺（徳川家の菩提寺）に謹慎して恭順の意向を伝えていたのである。

しかし納まらないのは旧幕臣と攘夷派である。彼らは、

新政府の幕府に対する対応や禄を失ったこと、賊軍となったことに憤った。会津藩（京都守護職）も桑名藩（京都所司代）もこのままでは納まらなかった。いままで官軍として京都の治安と天皇のために働き、犠牲も払ってきたにもかかわらず賊軍にされてしまったのである。

この徳川家への処遇を不服とし、旧幕府軍は大坂に結集した。総勢一万五千程の兵力に膨らんだ。前將軍慶喜は急速に抗戦へと傾いて行っただけの事態を診て大坂城に入り、この兵力なら勝てるかもしれないと考えていたようである。

会津と新撰組の兵八千が伏見街道より京に進軍し、桑名藩と京都見回り組^(注4)は伏見街道を五千の兵を率いて鳥羽街道より進撃した。これに対し、西郷隆盛は作戦主任伊地知正治を総監として薩摩兵二千をもって鳥羽街道を護らせた。また、伏見街道は長州兵一千八百が山田市之進を総監として、土佐兵三百を加えて護らせた。

旧幕府軍は大坂城を本営とし、新政府軍は東寺を本営とした。新政府軍は兵四千、これに対して旧幕府軍は大坂城の兵を合わせると一万五千。どうみても旧幕府軍が有利である。

時は慶応4年1月3日（1868年）、旧幕府軍を率いていたのは元大目付滝川具挙であった。開戦は旧幕府側より薩摩軍に向かって銃撃したことからはじまった。これに対し、薩摩長州軍が応戦した。薩摩藩の近代兵器に対して旧幕府軍は白兵戦で臨んだ。事もあるうに薩摩の大砲の音を聞いて、真っ先に逃げ出したのは指揮官の滝川具挙であった。もう、空いた口がふさがらない状況である。指揮官のいない旧幕府軍は狭い鳥羽街道を縦列に淀方面に逃げ出した。

新政府軍は、この狭い鳥羽街道を挟む陣形で、後込めの七連発ライフル、スペンサー銃（当時では一番の最新兵器）やミニエー銃で待ち構えていた。逃走中の指揮官の滝川具挙もこの銃撃戦で被弾し死んだ。烏合の衆と化した旧幕府軍は縦列に逃走したので、側面より両面から撃たれ恰好の餌食となった。



▲鳥羽、伏見の戦い

逃走中の旧幕府軍は、現老中である淀藩の城に逃げ込もうとした。しかし、藩主で現老中でもある淀城からの返答はあまりにも意外なものであった。「藩主稲葉正邦不在のため入城はお断りする」と言って城門はかたく閉ざしてしまった。背後から新政府軍が迫っていた。旧幕兵は新政府軍に追い詰められ、淀城の門前で一斉射撃により壊滅した。旧幕府軍に指揮官が存在せず、現老中の藩に入城を断られたこと自体、当時の政局の様子が窺い知れるというものである。

そこへ1月4日、征夷大將軍「仁和寺宮」が到着し、戦場に『錦の御旗』が翻ったのである。新政府軍の士気は一段とあがった。これをみた旧幕府軍の各藩は「錦の御旗」により賊軍に味方することになることを恐れ、戦線を離脱する藩が続出した。

徳川慶喜もまた卑怯にも勝敗が決まる前に老中、

松平容保(京都守護職)、松平定敬(京都所司代)等と幕閣の中心人物のみを連れて、夜陰に紛れて自分の味方の兵を見捨てて大坂城を密かに抜け出し、舟で江戸に逃げ帰ったのである。総指揮官が、勝敗が決まらぬ内にこのようなかたちで戦線離脱するのは前代未聞であり世界でも前例がない。この行為で慶喜の信用は地に落ち、旧幕府軍は自然崩壊していったのであった。

結果、奥羽以外は大垣藩をはじめ大半の藩は新政府に恭順の姿勢を示した。このとき、大垣藩藩主戸田氏共は謝罪と新政府軍への恭順を奏聞するため京に赴き、天皇に対して謹慎の意向を伝え、かつ誓約書を提出している。これにより大垣は焼野原にならず済んだのである。

新政府軍は東海道、東山道、北陸道と三道に分かれて京から東へ進軍した。大垣藩は東山道鎮撫隊に配属となった。大垣藩は佐幕派から勤王派に変わったことにより、東山道鎮撫隊では、常に先鋒という一番危険で敵の銃弾の盾となる役回りを強いられた。それでも大垣の兵は勇敢に戦い、江戸城総攻撃前頃には新政府軍よりやっと味方として認められるようになった。とはいえ禁門の変で大垣藩が佐幕派として薩長軍を痛めつけたことは事実。友、兄弟、同志を大垣兵に殺された薩長兵士の悲しみを思えば、薩長兵の個人的感情としては大垣藩兵士への恨みはそう簡単には拭いきれるものではなかった。裏切り者としての風当りは厳しかった。このような屈辱に耐えながら勇敢に戦った大垣の無名の戦士たちのおかげで今の^{とも}大垣が存在していることを、我々現代に生きる者として決して忘れてはならない。

東山道鎮撫隊は、総督に岩倉具定^(注5)、参謀に板垣退助、伊地知正治^(注6)であった。大垣藩は薩摩、長州、土佐の指揮下に置かれ、先鋒として敵の銃弾の盾となった。新政府軍は大垣藩士の屍の上を踏みつけて進軍したのである。

3 勝海舟と西郷隆盛の会談

この二人は、勝が幕府の軍艦奉行の時に西郷に面談を申し出て旧知であった。その勝との面談の印象を西郷が大久保利通に送った手紙に、「勝はとても知恵者である。おいどんの尊敬する佐久間象山先生に勝るとも劣らぬ程、国を憂いておる。これほどの見識と経験と現状把握力を持ち合わせた幕臣に今まで会ったことがなか。おいどんは勝を見直し申した」と賞賛している。この西郷の思いが無ければ「江戸城無血開城」はありえなかったであろう。また西郷が「勝先生」と呼ぶほど勝という人物を尊敬していた背景があったからこそ、この会談で西郷が勝の条件をすべて受け入れたのである。西郷、勝のどちらかでも交渉相手が違っていたらまず決裂していたであろう。明日に控えた新政府軍の江戸総攻撃を止められるのは、これまで新政府軍本営の総参謀として貢献してきた西郷隆盛以外には有り得なかった。長州、土佐も西郷には逆らえない状況であったからである。

西郷と勝の共通の思いは、「この内戦で漁夫の利をえるのは欧米列強であり、日本人同士が殺しあうてどうするのか」ということであった。西郷は至急、新政府軍の幹部を集め「明日の江戸総攻撃は中止にした。おいどんの判断に異議ある者は意見を言わんせ」と切り出した。しかし、新政府軍の指揮官である西郷隆盛の意向に異議を唱えられる者はいなかった。

西郷、勝の二人とも、「日本国」という大きな視野をもっていた。ここで二人がもし決裂していたら、江戸は焦土となりそのあとに欧米列強が乗り込んで、いとも簡単に日本を植民地にしてしまったことであろう。これは大英断であり、西郷隆盛と勝海舟にしかできない離れ技であった。

4 白河口の戦い

白河は奥州街道を守る重要な拠点として、代々有力な親藩、譜代大名が治めていた。

話は少々逸れるが、江戸時代には三大改革と言われている享保の改革、寛政の改革、天保の改革がある。この「寛政の改革」を成し遂げたのが、この白河藩主松平定信である。その彼が白河に赴任したころ（1782）は天明の大飢饉で国が荒れ果てていた。彼は自ら儉約に努め、領民のため食料救済措置を施したおかげで、東北地方で一人も餓死者が出なかったのは白河藩のみであったと言い伝えられている。当時としては異例のことであった。彼は「民は藩主のためにあるのではなく、民のために藩主がある」という信念を持っていた。それを実践したのである。また、教育にも力を入れており、藩校立教館や庶民のための郷校敷教舎などを設立し、文化、教育に積極的に取り組んだ。その後、幕府の老中首座として「寛政の改革」を成し遂げた名君である。

話を戻すと、新政府側の仙台藩、米沢藩は会津藩を救おうと、松平容保は謹慎しているからと赦免を新政府軍（東山道先鋒総督府が担当）に申し出ていた。新政府軍は、薩摩藩兵、大垣藩兵、長州藩兵、忍藩兵を主力として形成されていた。この申し出に対し東山道白河口総督府の参謀である世良修蔵は、「仙台藩と米沢藩に会津藩への総攻撃を命じたのはもう新政府軍内で決定された事である」と拒否したのである。両藩とも面子を潰されたと思ったのであろう。

しかし、世良は会津の真意を見抜いていた。世良の読み通り会津藩は着々と戦闘の準備をしていた。後世でも言われているが、会津の本心は恭順の意向はなく、家老梶原平馬^(注7)が中心となり徹底抗戦を唱え、藩論も西郷頼母以外戦いの意向で固まっていた。家老の西郷頼母は、藩主が京都守護職を受けるころから参戦に猛反対していた。よって頼母は容保により家老職を罷免され蟄居謹慎を命ぜられてしまい、戊辰戦争では一度も抗戦していない。容保はその頼母に白河口の戦いの総督を命じたのである。

このとき、容保は精神が異常と思われる程、冷静な判断が出来ていない。本来なら鳥羽、伏見の戦いより官軍の戦いを熟知している佐川官兵衛などの歴戦

の家臣がいたのである。この白河口の戦いは、関ヶ原合戦のごとく大事な戦いのはずであり歴戦の武将を当てるべきであった。

ところが容保は会津で蟄居謹慎していた頼母を呼び出し、総大将である総督に任命したのである。誠に異常な判断である。250年間の平和のお蔭で西郷頼母も実戦経験はまったくないのである。そこへ、不幸にも時を同じくして総督府の参謀世良修蔵が仙台藩士に宿で闇討ちされたとの報が入った。この事件により、新政府軍を本当に怒らせてしまったのである。

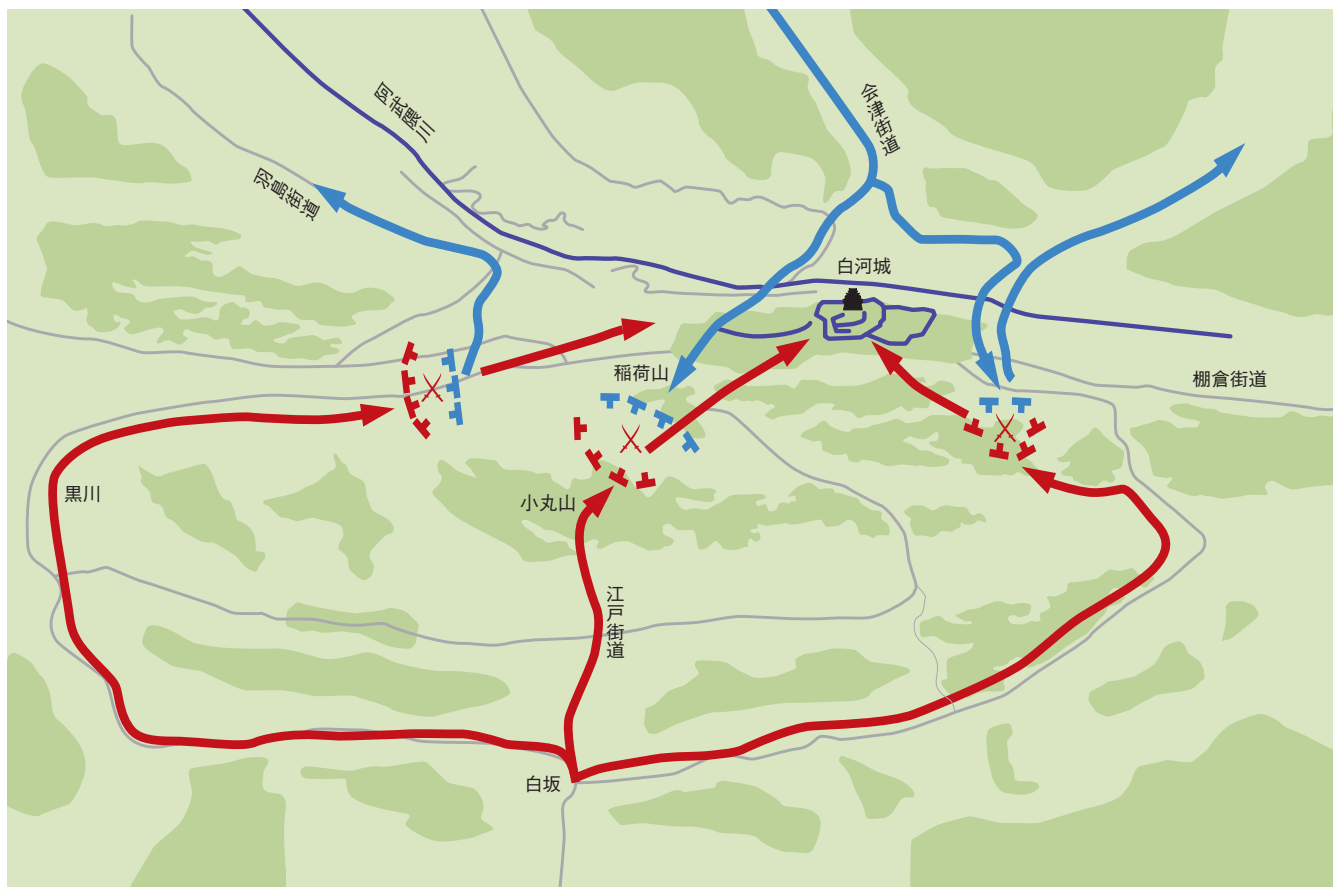
仙台藩は、江戸の大総督府にも容保が謹慎して恭順しているのに、攻撃はやめてほしいとの交渉中の出来事であったが、こうした工作も水の泡と帰ってしまった。こうなっては仙台藩も米沢藩も新政府軍の討伐の対象となることは明らかになったと判断した。よって、両藩が中心となり会津藩を援ける名目で奥州列藩同盟

を仙台、奥羽各藩と結成したのである。この同盟軍との最初の戦闘があったのが、この白河口の戦いであった。兵力は新政府軍約700名、会津、仙台、米沢藩を中心に兵2,500名で、奥羽側が圧倒的に有利であった。

新政府軍側は、兵を三隊に分け、中央隊参謀伊地知正治率いる薩摩、長州、大垣の兵を主力として、西郷頼母の陣取る稲荷山に進軍した。右翼隊は棚倉街道方面から薩摩兵二隊を、左翼隊は原方街道沿いに薩摩、長州、大垣を主力兵として進軍した。新政府軍は午前5時、三方より一斉に砲撃を開始した。

【戦果】

	兵力	大砲	戦死者
同盟軍	2,500名	8門	682名
新政府軍	700名	8門	12名



▲白河口の戦い

この戦いで、会津藩副総督横山主税をはじめ同盟側の指揮官のほとんどが命を落とした。このことは、この後の戦いに大きな影響を与えた。同盟軍側の参謀、家老格がすべて戦死してしまった。同盟軍に加わっていた奥羽各藩の主戦派の重臣が戦死したため新政府軍側に寝返る藩が続出した。結果は同盟軍の戦死者682名に対し、新政府軍の戦死者は12名であった。この惨敗にもかかわらず、総督の西郷頼母が帰還してきた。容保の怒りは尋常ではなかった。西郷頼母は再び罷免蟄居させられた。

それにも増して頼母自身には大変な悲劇が待っていた。自宅に戻ったら家族親戚21人が自決していたのである。頼母の足手まといとならぬように、また敵の辱めを受けないようにと妻が自決をさせたようである。一番下の娘は



◀白河合戦戦死墓

▼長州大垣藩戦死六名墓
(内四名大垣藩)



まだ2歳であったという。母のこの2歳児を短刀で刺す時の哀しみは想像を絶するものであったろうと推察する。

この白河古戦場に大垣藩士の墓が建っている。はるばる白河まで来て敵の銃弾に斃れた大垣藩士4人の死に様はどうだっただろうか。死の直前彼らは何を想ったであろうか。さぞ無念であったろう。

大垣藩の戦死者の名前が今わかっているだけ志士をあげたい。筆者も会津若松と白河の合戦跡を

【戊辰戦争での殉難者】

戦死場所	氏名	戒名	年齢
閏4月25日			
小丸山	鳥居勘右衛門 銃隊長	強義院慧山忠心居士	36歳
小丸山	河合 徳太郎 銃隊	本光忠然居士	20歳
小丸山	松井 於菟蔵 銃隊	寛山忠量居士	19歳
小丸山	稲井 工 砲隊	不明	
5月1日			
立石山	山田 七蔵 軍事奉行補佐	智鑑院仁巖忠勇居士	37歳
白河	坂 唯蔵 銃隊	智山忠慧居士	40歳
白河	稲葉 永蔵 嚮導	鉄心忠透居士	34歳
5月25日			
病死	渡部 兵之助 銃隊	大慶忠勇居士	23歳
小田川	東郷 助之丞 二番隊	不明	
5月26日			
白坂	酒井 源之丞 銃隊長	容光院薫功忠深居士	25歳
白坂	瀬口 興作 銃隊	全功忠淳信士	22歳
白坂	松岡 惣兵衛 銃隊	壘功忠精信士	20歳
6月1日			
泉田七曲	渋谷 重太郎 銃剣隊	見性院永昌忠源居士	22歳
泉田七曲	一川 齋吉 銃剣隊	是正院常心忠行居士	20歳
6月21日			
会津口	桑原 重吉 不明	全道忠髓信士	不明
7月15日			
仙台口	渡部 定次郎 銃隊	関山忠鉄居士	29歳
8月24日			
会津若松	吉田 彦三郎 軍事方	開基院忠勇長義居士	36歳
9月18日			
会津にて病死	松岡 利三治 不明	謙慶忠益居士	21歳

※「慶応四年戊辰戦争白河口の戦い18名の殉難者」白河青年会議所発行参照

見てきた。残念ながらショックは隠せなかった。また、会津若松での大垣藩二十人墓を探すのも難渋した。薩長土肥の墓は整然と整備されていたが、大垣藩二十人墓は墓地の一番端で傾きかけていた。また、墓碑銘も苔とセメントのようなものが塗られており、まったく判別がつかなかった。まさに、遠い異国で銃弾に斃れた志士たちの恨みごとが聞こえるようであった。大垣の人が他国に比べこの戦いの関心の無さを思うと悲しかった。前記の墓碑名はなかなか



▲稲荷山山頂への道



▲稲荷山から見える小山が小丸山新政府軍本営



▲稲荷山周辺

わからなかった。役所に問い合わせてもわからなかった。一部ではあるが、いろいろ尋ね歩いてわかった人々をあげたい。

この他、宇都宮戦争での殉難者、高木辰之助(45歳)、岩佐幸之助(41歳)、小寺庄次郎(53歳)、以下57名等々の紹介は誌面の都合で省略させていただくが、多くの大垣人が明治維新の人柱となったことを我々は決して忘れてはならないことであろう。

上記はごく一部の墓碑がある志士であるが、現実にはこの10倍以上の志士が無縁仏として葬られたことは確実であろう。

5 会津戦争

関東にあった新政府軍も江戸の整理を終え、ようやく全軍で北伐に動き始めることができるようになった。白河城を占領すれば、会津まではすぐである。容保は国境の守備を各隊に命じていたので、城はもぬけの殻状態であった。新政府軍も、大総督府(総督有栖川熾仁親王)のもと、奥羽鎮撫総督府、会津征討越後口総督府、奥羽追討白河口総督府、奥羽追討平潟口総督府のすべてが、会津攻撃可能となった。

奥羽列藩同盟の奥羽各藩は次々と寝返り、もはや会津に味方するものは無くなった。大垣藩が所属している奥羽征討白河口総督府には、板垣退助、伊地知正治、渡辺清、多久与兵衛という歴戦の参謀がついた。また、会津征討越後口総督府の参謀には西園寺公望、壬生基修、黒田清隆、山県有朋が任命された。各参謀はこれまでの各地の戦いの歴戦の指揮官で、この陣容を見ても万が一にも会津藩が勝てる見込みはない。

ここで会津の戦いより先立つ話として同盟軍の長岡藩の家老河合継之助についてふれておきたい。

新政府軍は、長岡で奮戦する長岡藩家老河合継之助に対する、奥羽征討越後口総督に西園寺公望を昇格させ、その参謀に山県有朋をつけた。有朋は巧な戦略を考え、新政府軍の隊を二手に分け、信濃

川榎峠で軍監三好軍太郎に兵二千五百を与え、兵四百の長岡軍を城から引きずり出すことに成功した。長岡の兵は有朋の率いる兵に挟み撃ちされ、壊滅寸前であった。それを知った継之助は自慢のガトリング砲（最新兵器の機関銃）を率いて急行したが、長岡城は平城なので、その間に新政府軍は長岡城を占領してしまっていた。河合継之助は、城を諦め拠点を栃尾に集結させた。

一時的には継之助のガトリング砲の効果もあって挽回の兆しがみえたが、指揮官の河合継之助自身が被弾した。かなりの重傷で前線での指揮は取れなくなり、継之助の落命とともに長岡藩は降伏した。

長岡藩の陥落は、山国である会津藩にとって補給路を断たれて大変な致命傷となった。周りを山に囲まれ食糧、武器、弾薬が限界を迎えていた。まして新政府軍が会津藩の鶴ヶ城を取り囲んだ。会津兵は国境を守るため各地に分散されていて城に残るのは少数の守備兵のみであった。

ここで、会津の隊の編成を記しておきたい。

		士中隊	寄合組隊	足軽隊
玄武隊	50歳以上	1隊	1隊	2隊
青竜隊	36～49歳	3隊	2隊	4隊
朱雀隊	18～35歳	4隊	4隊	4隊
白虎隊	16～17歳	2隊	2隊	2隊

会津の精鋭部隊朱雀隊は、笹山の国境、戸ノ口原、二本松街道、母成峠で新政府軍の攻撃を阻止すべく配備されていた。これに対する新政府軍の会津攻撃の主力は、奥羽追討白河口総督府であった。総督は正親町公薫、参謀に板垣退助、伊地知正治など鳥羽伏見の戦いからの歴戦の精鋭部隊であった。大垣藩兵も多く加わっていた。

会津軍は会津国境である母成峠で、新政府軍の会津城下への侵入を阻止しようと考えていた。兵力は会津側が大鳥圭介率いる約四百名、それに対する新政府軍側は約三千名である。武器、弾薬、食糧等補給が途絶えた会津軍にとっては最後の抗戦である。閏8月21日早朝、会津軍は隊を勝岩口、萩岡口、母成峠の三つに分け防戦体制に入っていた。

新政府軍参謀西園寺公望は母成峠を攻略して、一気に会津城下に進軍しようと考えていた。薩摩砲兵隊を率いる大山巖は、射程距離二千六百メートルもある四斤山砲で対峙した。四斤山砲やアームストロング砲は一番遠い第三母成峠台場までも麓から届いてしまう近代兵器である。会津兵が数日もかけて築造した台場は、すべて一時間も経ぬ間にこれらの大砲の砲弾で壊滅した。近代兵器の凄さが証明された戦いであった。会津軍は大打撃を受けた。本来主力になるはずの精鋭部隊の朱雀隊が、砲弾に吹き飛ばされ壊滅状態になってしまったのである。敗残兵は会津方面に逃走した。



▲復元された会津若松城



▲荒れ果てた大垣藩二十人墓



▲邪魔者扱いの大垣藩士の墓

小松帯刀なくして明治維新なし

お台場には会津の精鋭部隊の屍だけが残された。刀でなら師範クラスの人が目に見えない砲弾で一生を終えるのである。さぞかし無念であったことであろうと推察する。

会津には京都守護職を引き受けてから、京での戦費が膨大にかかり近代兵器を購入する軍資金がなかった。この母成峠はうたいの台場も人力で強固につくったが、新政府軍のアームストロング砲が一気に台場を吹飛ばした。新政府軍には他にも四斤山砲という大砲があり、射程距離六百メートルもあるため台場は会津兵の屍の山と化していった。会津軍は敵の见えない大砲攻撃に大混乱となり、大鳥も総退却を命じ会津方面に退却した。会津にとって一番の打撃は、朱雀隊という精鋭部隊が大砲により壊滅状態になったことであつた。

新政府軍は手を緩めることなく、会津城下に進軍していった。最後の砦であった十六橋も会津兵が落さんとする前に新政府軍が占拠していたので、この橋を渡って簡単に城下に入城できた。藩主容保は国境防備に兵を出陣させていたので、城には少数の守

備兵しか残っていなかったのである。容保は至急国境より帰還の伝令を出したが、すでに鶴ヶ城は新政府軍に包囲されており、逆に会津兵が城に入城できない状態になってしまっていた。しかし会津兵は何とか入城すべく、守備が手薄であった融通寺口に兵を集め、ここを突破口に城内に入り、戦略を籠城戦に切り替えた。この間、守備兵は懸命の防戦を行っていた。また、士族の女性も入城し城郭内で薙刀での戦いに挑んだが、新政府軍は七連発スペンサー銃で相対し、会津女性兵の屍は累々と重なっていった。城内に籠る会津兵は、男女の別なく実に勇敢に戦った。

新政府軍はこれ以上死者を増やさぬよう、大砲を小田山に移動させた。小田山は城内が一望に見える小山であった。新政府軍は戦いの早期決着のため大砲を一日2500発ほど打ち続けた。城の外観は残っていたが床はすべて崩れ落ちた。

新政府軍に寝返っていた米沢藩藩主上杉齊憲なり のりが、新政府軍参謀板垣退助に対して、自分が松平容保に対して降伏の説得をしたいと申し出た。板垣は即刻承した。



会津攻撃前夜▶

上杉齊憲「おぬしの無念はよくわかる。しかし、領国の人民をもうこれ以上殺すな。彼らに何の罪があろうか。重税に苦しみ田畑を荒らされ困窮の極みにある。容保殿はよくがんばったと思う。このくらいでもう新政府に降伏しても、だれも非難する者などいない。藩主は民の事を一番に考えねばならぬ。よいな、容保殿」

松平容保「わしは一番大切な事を忘れていたかもしれん。大切なのは領民であり家臣を含め皆々大義とはいえ大変申し訳なく存ずる。明日にでも武装解除し降伏をしようと思う。新政府軍に降伏の事、取り持ってくれぬか。齊憲殿」

上杉齊憲「相承知した容保殿。後の事はこの齊憲にお任せくだされ。悪いようには決して致さぬ」

松平容保「う……」

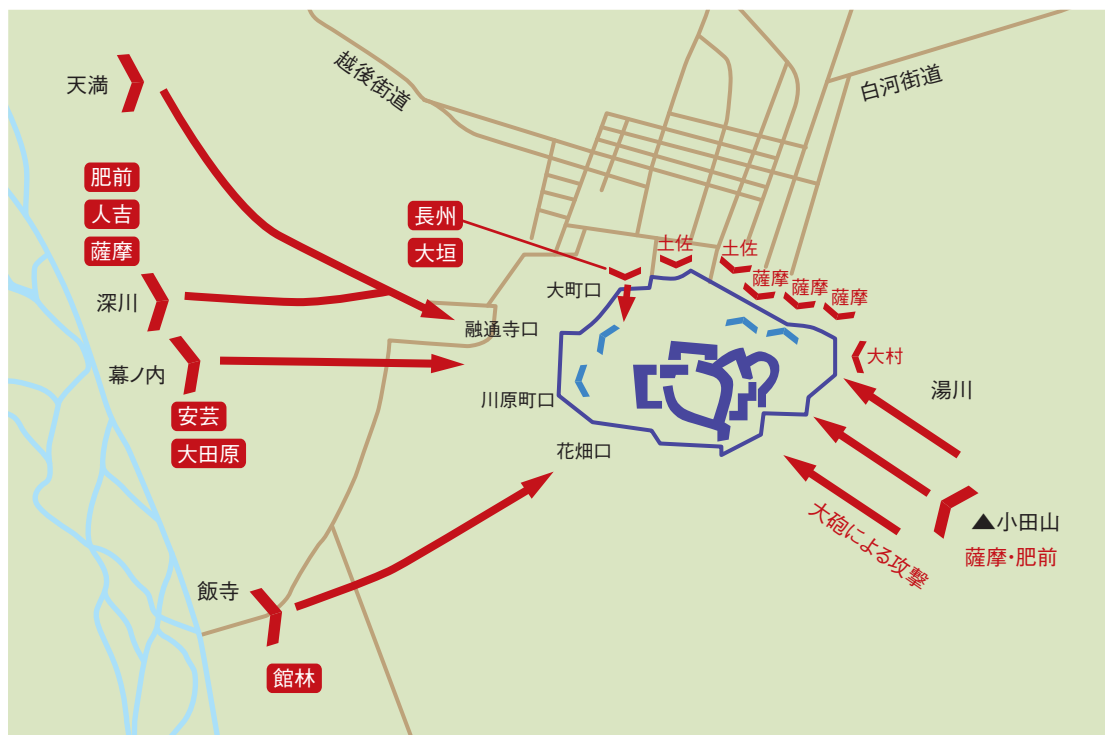
容保は涙が込みあげてきていた。そして、松平容保は戦争首謀者として筆頭家老菅野権兵衛の首を持参し、降伏状と共に参謀の板垣退助に恭しく差し出したのである。

6 戸ノ口原の戦いと白虎隊

話は前後するが、白虎隊の悲劇を最後に取り上げて締めくりたい。本来白虎隊は、予備兵であった。

士中隊の一番隊は藩主松平喜徳(1868年家督を相続)を護衛し、二番隊は前藩主容保の護衛を担当する役目であった。しかし会津軍は各地で敗戦を重ね、彼らにも召集がかかった。一行は滝沢本陣に結集していた。そこへ戸ノ口原方面から援軍の要請がきた。

飯盛山で立派に自刃して果てた十九士は、この二番隊の隊士である。総勢42名で編成されていた。容保の命令で、二番隊は白河街道の滝沢本陣に待機していた。容保、喜徳は城に帰還した。隊長日向内記ひなたないきの命令で隊を二手に分け、半数は戸ノ口原方面へ先に前進。すぐ残りの半数志士も出陣し滝沢峠に登りそこで合流した。その時の戦闘は上強清水当たりで行われていた。隊が赤井谷地に近づいたころ夜が更けた。



◀会津攻撃

小松帯刀なくして明治維新なし
時に利あらず、ともに忠に殉じた大垣と会津の魂



▲新政府軍と会津藩の決戦模様

隊長の日向内記は食糧を調達してくるとして下山していったが、日向は二度と戻ることはなかった(実は、彼は食糧調達後、敵に遭遇し、戻れなかった)。しかたなく原田半隊長が指揮をとることになった。彼らは赤井谷地北端の丘陵に出て敵の出現に備えていた。前線にいたはずの味方の奇正隊、敢死隊はすでに戦況不利と判断して退却していた。

戦況が白虎隊には知らされてなかった。また経験不足ゆえに戦況状況を常に把握する訓練も受けていなかった。白虎隊は取り残された。敵の声が聞こえる程近くに新政府軍が駐屯しており、退却もできない状況であった。戸ノ口原から退却した二番隊は、途中離散したりまた合流したりして、会津まで道なき道をさまよっていた。このままではいつかは敵に見つかるだろうと判断し、彼らは飯盛山の北斜面にある戸ノ口の洞穴に入った。長さ150メートルほどであるが、この洞穴は敵は知らないはずであった。この洞穴を抜けると、飯盛山の中腹に出るのである。そこからは鶴ヶ城がはるかに望まれ、会津の町並みもよく見える場所であった。

そのとき、彼らの眼前に見えたのがすでに火の手が上がり炎上しているように見える鶴ヶ城であった(実際は台所が炎上していたのであって、城は健在であった)。昨夜来の戦闘で過敏になっている神経が、



▲日本一の藩校日新館

落城と勘違いをさせたのであろう。

唯一の生き証人、飯沼貞吉(自決後村人の懸命の救出で蘇生。彼も飯盛山に遺言により後に埋葬されている)の証言によると篠田儀三郎は「戸ノ口原方面の戦いを命ぜられ出陣したもの、敗れて退却してきた。この様子ではもはや身を置く場所も無いであろう。生き延びるために見苦しい行為をするより、士中隊(上級武士)として誇りを保って自ら死のう」

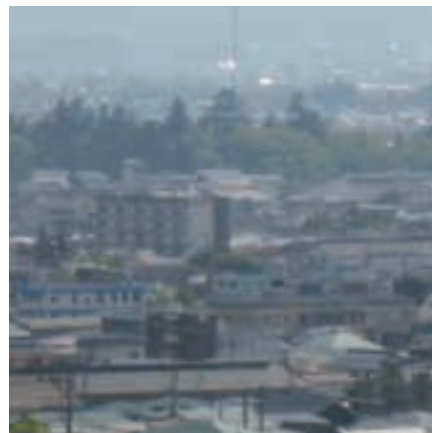
と言い、皆も同意した。このようにして、途中蘇生した飯沼貞吉を除いた十九士の命が散ったのである。純粹すぎた。当時の会津の日新館は国内では一番学問が進んでいた。坂本龍馬も訪れている。明治政府の高官になった者の中には、日新館で学んだ人が多くいる。もし彼らが生きていたら、明治政府にかなりの貢献ができた人材も出たことであろう。日本人同士「大義」とはいえ、日本国にとって大変な人材を失った戦いであった。彼らの碑が飯盛山の中腹に立っている。



▲戸ノ口原洞穴



▲会津城の状況をうかがう白虎隊士



▲飯盛山からみた会津若松城



▲白虎隊十九士の墓



▲白虎隊十九士の墓

- (注1) 攘夷…日本において幕末に広まった思想で、外国人を日本に入
れず排斥しようとする思想。キリスト教への文化侵略を食い止め
ようということも含まれていた。
- (注2) 長州ファイブ…長州は四か国連合艦隊に下関で惨敗し、攘夷の
困難に気づき逆に欧州から学ぼうと藩論が変わった。そこで長
州藩は密かに五人に留学をさせた。その五人とは、伊藤博文、井
上 馨、遠藤謹助、山尾庸三、野村弥吉である。
- (注3) 幕藩体制…幕府を頂点に統治されているが、各大名の領国で
は独立した行政権限をあたえられていた。よって、統一国家では
なく独立国の連合国家のこと。
- (注4) 見回り組…江戸の末期に浪士、農民で組織された新撰組に対し、
幕臣のみで結成された京都治安維持組織。主に、御所、二条城
を警護した。新撰組は町屋や祇園や三条あたりを担当した。
- (注5) 岩倉具定…岩倉具視の二男。東山道先鋒軍総督(参謀板垣退
助)。公爵。貴族院議員、学習院院長。
- (注6) 伊地知正治…薩摩藩士。軍奉行。戊辰戦争に功績や修史刊館
総裁。伯爵。
- (注7) 梶原平馬…幕末の会津藩家老。徹底抗戦を主張。根室に移住
その地で死去。

参考図書

「小松帯刀伝」 宮帯出版社 瀬野富吉著
「戊辰戦争」 吉川弘文館 保谷徹著
「西郷頼母」 会津武家屋敷文化財資料室
「会津の幕末維新」 会津若松市史研究会

※文中の写真は全て筆者撮影

(2015.6.12) OKB総研 特命研究員 三矢 昭夫